

第二部 パネルディスカッション議事録

コーディネーター

四国大学短期大学部 教授 加渡 いづみ 氏

パネラー

特定非営利活動法人 徳島県消費者協会 会長 佐野 勝代 氏

生活協同組合コープ自然派しこく 理事長 泉川 香 氏

BUTTOBI BERRY ORGANIC 有機いちご生産者 田渕 善昭 氏

NARUMI FARM 有機野菜生産者 阿部 なるみ 氏

株式会社フードハブ・プロジェクト 農業長 白桃 薫 氏

(敬称略)

【司会】

大変お待たせいたしました。ここから第二部のパネルディスカッション「有機農産物をエシカル消費で支える」を開催いたします。只今、予定時刻より若干早く進行しております。第二部のパネルディスカッションは約1時間程度を予定しておりますので、予定より早く終了することを御了承ください。

まずは皆様にパネルディスカッションに御登壇いただきます、皆様を御紹介いたします。コーディネーターといたしまして、四国大学短期大学部教授、加渡 いづみ様を御紹介いたします。加渡様は2005年、金融知識普及功績者表彰、2017年消費者支援功労者表彰を受賞され、企業や学校に出向き、エシカル消費の普及活動に精力的に取り組んでおられます。

続きまして、パネラーの皆様をご紹介します。まず、有機いちご生産者のBUTTOBI BERRY ORGANIC 田渕 善昭様。続いて、有機野菜生産者のNARUMI FARM 阿部 なるみ様、次に株式会社フードハブ・プロジェクト農業長 白桃 薫様。次に生活協同組合コープ自然派しこく 泉川 香様。最後に、特定非営利活動法人徳島県消費者協会会長 佐野 勝代様でございます。以上の皆様です。ここからの進行につきましては、四国大学短期大学部教授、加渡 いづみ様にお願いいたします。

【加渡】

はいありがとうございます。ただいま御紹介をいただきました。四国大学の加渡でございます。徳島県はエシカル消費先進県。SDGs 先進県を標榜しております。私たち消費者は、年々食に対する関心を高めております。それは目の前の商品棚に並んでいる野菜もですが、この農産物はいったいどこで、誰が、どのようにして作ったものなんだろうか。つまり、その一

一つの農産物の持つバックグラウンドやストーリーも含めて非常に高い関心を持っております、

今日のディスカッションのテーマは、「有機農産物をエシカル消費で支える」となっております。地域と食の持続可能性を考える中で、私たち消費者はバイコット。買うことによって、その生産者や商品やお店を応援していく。そのバイコットの行動をこれからどのように考えればいいのか、生産者、流通、消費者の立場からゲストをお招きしながら、今日は皆さんと一緒に有機農業、有機農産物について考えてまいりたいと思います。よろしく願いいたします。

それでは、まず今日お迎えをしております。パネリストの皆様、本当にいろいろなお立場で御登壇をいただいております。生産の立場から、加工の立場から、流通の立場、そして消費者の立場でございます。まずは現在の活動の状況につきまして、お1方ずつ御紹介をお願いしたいと思えます。まず、始めに BUTTOBI BERRY ORGANIC の田淵さんよろしく願いいたします。

【田淵】

BUTTOBI BERRY ORGANIC は、後世に負の遺産を残さない社会構築に貢献できるよう努めていくということを理念としまして、昨年1シーズンを迎えました。今年で2シーズン目のいちご栽培となりますが、昨年の1シーズン目において四国では初の有機 JAS 認証を取り、オーガニック・エコフェスタのいちご部門で最優秀賞をいただきました。

なぜこういうことになったかという、ズバリ一言。BLOF 理論のおかげだと思います。今、農林水産省の方もどうやったら、みどりの食料システム戦略が達成できるかというところで、BLOF 理論という有機農法に大変注目していらっしゃると思います。小祝先生が常に仰ってたのが、どんな方でもどんな初心者でも BLOF 理論をきっちりと実践すれば必ず高品質なものができることを常々お話しされていました。私は農業経験も何もないので、いちご栽培1年目から、とにかく BLOF 理論に徹するしかないと考え、一生懸命いちごの生産をしたところ、本当に高品質な栄養価にしても中身まで証明できるようないちごが生産でき、BLOF 理論ってすごいなって痛感しました。

さらに今年はその BLOF 理論による栽培の精度を上げたところ、味が格段に上がってきました。食物を科学的に理解し、ポテンシャルをどうやって上げてやるかということを考えると、本当に農薬も使わなくても立派ないちごができるということを証明できたと思います。

いちごは4月から苗管理を始め、暑い夏を乗り越えて9月下旬にやっとハウスに定植ができます。そして、そこからハウスの中の管理を始め、年

末から年明けに皆さんのもとにいちごを届けられますが、夏場を乗り切るに当って炭疽病や虫の被害で大変な思いをするんです。

特に炭疽病という怖い病気がありまして、感染すれば必ず死んでしまう。それが広がり、苗が全滅したっていう症例もたくさんあるっていうところで、私が1年目に有機で育苗をやると言ったところ、農業支援センターの方が心配して飛んできてくれました。田淵さん本当にいちごを有機でやるんですか。BLOF 理論を習ったんで、徹底的にやってみたいと思います。やめた方がいい。絶対やめた方がいい。まずは普通にやってみて3年5年たって、それから挑戦すればいいんじゃないですか。ものすごく心配してくれたんですけども、もう今年は初年度なんですけど、とにかく有機 JAS 認証を取るのが一番の目標だったので、絶対農薬は使わない、何か全滅したら苗を買うという覚悟で育苗に取りかかりました。取りかかる当初に炭疽病の検査をしてくれました。そしたら、育苗全体のもう既に7割が炭疽病に感染していると。夏を乗り越えられず間違いなく全滅します。と言い切られましたが、BLOF 理論を理解し、微生物を活用した管理を続けたところ、苗がいっぱい余りました。

去年の炭疽病率が全体の5%。さらに今年は去年の教訓を生かしていろんな改良を加えたところ、6月の初め炭疽病率100%でスタートしました。結果、炭素病率2%までに下がりました。農薬なんか使わなくてもできるんです。みんな頭からできないと思っているからできないだけなんです。難しいいちごでもやればできるんです。政府の方がみどりの食料システム戦略で大きな目標を立てて追い風が吹き始めました。これからますます有機農業が盛んになっていき、そうした技術の確立も進んでいくと思います。それでいつかこの社会からオーガニックという言葉さえなくなるような社会が来ることを私は強く望んでおります。短いんですけど、ありがとうございました。

【加渡】

ありがとうございました。せっかく大きなパネルを持って来てくださってますので田淵さん説明をお願いできますか。あと、私から質問ですが、「BUTTOBI」という名前の由来は何でしょうか。

【田淵】

ぶっ飛びって言えば何かスラングでぶっ飛んで変なやつだとか俗語のイメージがあるんですが、本来の意味は高く突き抜けるとか、とんでもないといった意味があります。どうせやるなら本当に世界一のいちごを作ろう、誰もかなわないようないちごを作りたいなという思いでぶっ飛びっていう名前にしたんです。

今回パネルを持ってこさせていただいたんですが、現在、うちのいちごや日本で流通しているいちごの容器は、ほとんどプラスチック素材に入って販売してると思うんです。けれど、これ西洋諸国に行ったらプラスチック素材はオーガニックじゃないじゃないと言われるそうです。こういうプラスチックを使うことは社会環境を守っていない、オーガニックじゃないよって言われるそうです。これから日本が食料システム戦略で有機が進んでいく中で、先陣を切ってプラスチックの使用をやめようって思って相談したところ、いい段ボール屋さんと知り合うことができました。現在は、段ボール製の箱を使っています。有機 JAS 認証のシールも最新技術によってケースに印字ができ資源の節約にもなる。印刷屋さんも持続可能な社会を目指した仕事がしたいということで、つい最近知り合いました。ポスターも段ボールなんです。上質紙を使わなくても、段ボールでできる世の中になってるんです。とりあえず農産物に限ったことでスタートするんですけど、こういった梱包資材に関しても過剰包装をやめて、資源を守るようなことが本当のオーガニックだよという意識が、日本人の中にも浸透していくようになってもらえればなと思い御紹介させていただきました。

【加渡】

ありがとうございました。それでは続きまして、NARUMI FARM の阿部様よろしく願いいたします。

【阿部】

皆さん、こんにちは上勝町の山の上でオーガニックトマトを中心に6反の畑をやっている。NARUMI FARM 阿部 なるみと申します。私は、徳島県に来るまでは東京で海外関係のプロジェクトで働いて普通に会社員をしていました。農業はすごく興味があって体験ですとか、勉強会とか、そういうのにはしょっちゅう参加してたんですけど、実際に大根を抜いたのは9年前が初めてといった。何も知らない未経験で大阪出身です。何もわかってなくて、田舎に住んだこともなくて、車も運転できないっていうところから始まりました。

きっかけは、20代の頃に私はアメリカのニューヨークの大都市の大学で学んでいました。たまたま選んだ学校がそこにあったというだけで、ニューヨークは派手なイメージがありますが、勉強が大変でもう本当に遊ぶ暇もないくらいテストとか課題に追われた大変な学生生活でした。その時もみんな若いんですが、あの町ではオーガニックマルシェとかがいたるところで開かれていて、私たちは体調を崩したり、風邪をひいたりしたら真っ先にそこに行ってオレンジジュースとかリンゴジュースを買って1リットル飲んだら風邪が治るとみんな言っていて、風邪をひいたら真っ先にそう

いうオーガニックジュースを飲んでました。そういう感じで、オーガニックのレストランとかカフェもいっぱいあり、身近にオーガニックのものが安く手に入るという環境で学生時代を過ごしました。

帰国してから東京でOLをしてたんですけども、もう仕事が本当に大変で、その時も体調を崩したときは、あのスーパーに行って野菜を買うのが趣味な感じで、そこでちょっとエネルギーとかパワーチャージをしてたっていう感じでした。そこから、もうちょっと自分の好きなことをやりたいなと思って、2014年におばあちゃんたちの「つまもの」で有名な上勝町に農業体験に来ました。農業をやったら生活田舎でできるかなと思って、その後に高知県の土佐自然塾に入り、今はなき山下一穂さんという土まるごと堆肥化で有名な有機農業の先生がいらっしゃる学校に1年通いました。

そこは、一年中朝5時から夜10時まで出荷と栽培で休みがなく、15人中5人が辞めるっていうスパルタの学校で、1年中夏も冬も外にいるという経験をして、そこで私は何もわかってなかったんですけども、根性だけはついて、何とかなるみたいなことがわかって、今上勝町の山の上で6反の畑をほぼ一人でやっています。最初はオーガニックトマトでマルチも全部使ってやってたんですけども、だんだん露地野菜とかもやり出して、自分の体力を考え出して、その時に自然がやってくれるんだなっていうことがわかってきたんですね。今はもう不耕起の自然栽培を半分以上やってまして、トマトも5年間耕していません。今は世界で不耕起栽培がすごく注目されています。

日本は80%が山間部の国土なので、私は山間部でできる農業を探したいなどの思いと、女性でもできる農業というところもすごく興味があります。誰もほとんどやってないですし、難しいとされてますけども、無肥料不耕起とかでも野菜が育つんだなということが本当に分かってきて、人間の想像を超える自然の世界があるんだなということが、8年目にしてわかってきたところです。

あと加工品も作っていますが、野菜とかトマトの廃棄を減らしゼロ廃棄にしたいので加工品も作っています。

上勝町はゼロウェイストでも有名な町で、家のハウスも全部リサイクル資材を使っています。最初は初期投資が1,000万円以上とか、皆さん投資されてるんですけど、ちょっとハードルが高いと思ってほとんど自分で作ったりしてやっています。上勝町には何でもくるくるショップがあっという間にないものをいただいたり、もう町中の人やがやっていて、私も利用させていただいています。いろんな農機具も貰え、今日着ているこの赤いフリースもそこからいただいたものです。まあそうした農業ですが、ものが循環する暮らしを楽しんでできるような仕組みができればなと思っています。今

日は女性としていろいろ意見が言えたらいいなと思って参加させていただいてます。皆さんよろしく願います。

【加渡】

ありがとうございました。続きまして、株式会社フードハブ・プロジェクト白桃さんお願いいたします。

【白桃】

皆さん、こんにちは、フードハブ・プロジェクトの白桃と申します。よろしく願います。

私は神山から今日やってまいりました。我々がやっているのをもしかしたら「かまパンストア」とか、「かま屋」をご存知の方はいらっしゃるでしょうか。ありがとうございます。神山でそういったパン屋さんとか食堂を自社で育てたお野菜を使ったそういったお店をやっております。前のスライドにもあるように、農業法人株式会社フードハブ・プロジェクトということで、我々がやっているのは、本質的にはやっぱり農業ですね。農業を中心に生産を中心に6次産業化、加工とかまでやっているような取り組みになります。

我々やっていること、食の地域内循環システムということで、地域の中で我々農業なので食ですね。食を中心に、それが地域の中で循環して、お金も食べ物も循環していくようなそんな小さな仕組みを神山でやっております。我々少しやり過ぎているので、説明が難しいところはあるんですけど、真ん中にあるのは、全国的な話で農家さんがどんどん減ってきているということで、耕作放棄とかいろいろな問題が起こってますが、それを中心に置いて農家さんを育成する取組を進めています。それを支えるために地域の人たちが地域で育てたものを地域の人たちが食べて、その食べた消費行動がその人たちを育てる仕組みを回していく。お金に使われるということで、食べ支えていくという行動を起こすために先程言った食堂とかパン屋さんとかですね。そこで消費行動を起こすことによって、その仕組みが支えられていくというような物事になっております。

そのほかにも学校給食とか子供たちへの給食教育も含めて、一緒に食べる人も地域の農業とか食文化を考えられるような機会をつくることをやっています。今日は有機農業フェアということなので、我々の農業のところを少し詳しく話します。資料のスライドにもありますが、育てるっていうところなんですけど、我々は人を育てるところが有機農家さんを育てましょうということで、農林水産省の準備型という学ぶ研修制度を使わせていただきながら、有機栽培や一部お米に関しては特別栽培や化学肥料を不使用で農薬を減農薬で育てたりしています。また、種を継ぐというこ

とで、地域で 80 年前から採っているお米の種とか、小麦の種があるので、それを継いでいこうみたいなことに取り組んでいます。農業の技術的な面は田淵さんと同じで BLOF 理論に取り組んでいます。本当にありがたいことで誰でも有機農業をできるようにちゃんと学ぶことができます。うちにも研修生が毎年素人の、農業をやったことない方がたくさん来られます。土も触ったことないですってという方が 1 年ぐらい有機農業をやって研修が終わった頃には、農家として 1 人前になれるようなそんな農業をサポートできるような技術もあります。そういうものを使いながら、ベーシックな有機農業をやれる農家になります。それで、いろいろ組み合わせて、地域の方たちに有機農産物を届けています。今の時期ですと地元のキョーエイさんとかに有機にんじんが置いてありますので、是非皆さんも見かけたら我々の農家さんを育てる仕組みを食べて支えていただければと思います。簡単にですけど紹介させてください。

【加渡】

どうもありがとうございます。続きまして、コープ自然派しこく 泉川さんお願いいたします。

【泉川】

皆様こんにちは。泉川です。よろしくをお願いいたします。コープ自然派では「誰もが有機農産物を食べることができる社会」をスローガンに、私たちのみどり戦略を進めようと様々な取り組みを進めています。

2009 年に徳島県小松島市に、2012 年に熊本県山都町にそれぞれ有機農業を志す人のための学校を開設しました。先ほどからお話に何度も出てくる BLOF 理論を学ぶことができる学校です。最近では、組合員を巻き込んだ収穫体験などの活動に力を入れております。

真ん中の写真ですけれども、数年前から何年も継続して行っている田んぼの生き物調査の親子イベントで、毎年人気のイベントとなっております。商品カタログ上で環境支払いカンパという形で組合員からカンパを募り、鳴門市のビオトープ整備や兵庫県朝来市のコウノトリの巣塔設置などに活用いたしました。真ん中の大きい写真ですが、2022 年北海道アンバサダーとして国産有機小麦 1,000 トンの生産を目指すと宣言してくださった大規模循環農業を実践されている生産者の圃場を見学した時のものです。訪れた理事が学んだことや体験したことを持ち帰り、多くの組合員に知ってもらうためにイベントとして報告会や試食会を開催しました。

一番右ですが、JA 東とくしまと連携してネオニコチノイド系農薬不使用を実現して、昨年 11 月より小松島市の幼小中学校の学校給食に無農薬米の納入が始まっています。以上報告とさせていただきます。

【加渡】

ありがとうございました。それでは最後になりました。徳島県消費者協会の佐野会長お願いいたします。

【佐野】

消費者協会の佐野でございます。よろしくお願いいたします。わたくしどもは、各種団体と協力をいたしまして、調査教育啓発活動などを行っておりまして、安全安心で住み良い社会を目指して活動をしているところでございます。

県下に 26 地区協会がございまして活動を行っております。そのほかにも受託事業といたしまして、県からの委託で消費者大学校、大学院を開講いたしております。大学院につきましては、エシカル消費コースですとかリスクコミュニケーション養成・食品表示コースというものも設けております。また、外部からの依頼に関しましては講師の派遣を行い、消費者教育を行っているところでございます。消費者協会の中に部会がございまして、グリーン購入部会は安全安心な商品を共同購入しようという部会でございます。それから調査研究部会がございまして、これは一昨年度よりエシカル商品マークのついた商品の一部を取り上げまして、どのぐらい認知度があるかなという調査をいたしました。一昨年は 30% ぐらいだったんですけれども、取扱店舗ですとか、その商品についての知識等を学習したところ、昨年は上昇いたしまして 60% ぐらいの認知度になったというところでございます。それから食品表示がきちんとできているかどうかというふうなウオッチャー調査というのも 80 名ぐらいの会員で行っているところでもございます。あと、啓発活動として食品ロス削減キャンペーン、それから振り込め詐欺防止キャンペーンなどを年末に行っているところでもございます。それから県のプラごみゼロ徳島スマート宣言、これは県と 4 団体で行ったものですが、参加し、徳島 SDGs プラットフォーム、これは皆さん御存じと思うんですが、個人会も募っております。県の事業でございまして、これも団体としてまた個人として参加をしているところでもございます。それから、昨年 10 月にございました食料安全保障シンポジウム、これも協賛させていただきまして、今後の農業を見つめ直していくことを会員の皆様とともに、これから勉強してまいりたいと思っていますところでございます。

まず、一人一人ができることから取り組んでいく SDGs を目指していくということを心がけて努力をいたしております。以上でございます。

【加渡】

はいありがとうございます。5人の皆様から活動の報告いただきました。さあ、ここからは少し意見交換に入ってまいりたいと思いますが、今食にまつわる言葉たくさんございます。有機農業、有機農産物、エコファーマー、GAP、オーガニック、自然栽培、無農薬、減農薬、いろんな言葉が私たち周り見聞きするんですが、消費者はこれ全てきちっと違いが理解できているんだろうかという、これまたなかなか難しいのではないかなと思うんですね。

ここですみません皆さんにちょっと御協力ください。私が今から御質問を申し上げますので、3択でお答えください。有機農産物、あるいは有機農業って何ですかって聞かれた時に、まず1つ目です。言葉も知ってる。任せといて説明できるよっていう方、グー。いや言葉はよく聞く知ってるでも説明してみても言われたらちょっと厳しいっていう人、チョキ。そもそも有機知らない方はパーです。グーかチョキかパーか、ちょっとお決めいただきまして、私が掛け声をかけます。ジャンケンって掛けますので、一斉に高く掲げてくださいますか高く掲げていただいたら、しばらくそのままで右を見て左見て確認をお願いいたします。それではジャンケンどうぞ。

会場の皆さんどうでしょうグーとチョキが半々ぐらいですかね。はい。どうもありがとうございます。ということで及川次長に質問をしたいんですが、なかなか説明してって言われると難しいです。じゃ、今日のテーマです。有機農産物って何ですかと聞かれたらどういうものなんでしょうか。すいません簡単に分かりやすく御説明をお願いいたします。

【及川】

できるだけ分かりやすくということで、説明させていただきます。化学的に合成された肥料及び農薬の使用を避けるということ。また、遺伝子組み換え体を使用していないことが栽培上の条件です。

基本的な概念といたしましては、先ほど田淵さん、阿部さん、白桃さんからあった土づくり、土壌の性質に由来させ生産力を発揮させるということで、農業生産に由来する環境負荷をできるだけ低減させた農業が有機農業となります。ただ、農産物の流通にあって、これは有機、これは有機ではないことが分からない。また、一対一で買う分にはお互い顔が見える関係で有機か否かが判断できますが、いろいろなルートで流通しているものは分からないことが国際的に問題になりました。

このため、コーデックスという国際的な食品の規格を決める機関で、有機農産物についてのルールが決まりました。我が国でもコーデックスの考えを踏まえ日本の有機 JAS 規格というのを決め、その規格に沿って第三者

が認証したものにのみ有機 JAS マークをつけて有機農産物と名乗っていいというルールになっているということでございます。

【加渡】

なかなか難しいですね。消費者が一番知りたいのはおっしゃいましたように手に取ったときに、これ有機農産物かどうなのか知りたいんですね。それはそのコーデックス規格っていうのがあるというふうなお話でしたが、何かシールとかマークとか、それはないんですか日本としては。

【及川】

有機 JAS マークという緑色のマークがございます。第三者の認証を受けた農産物じゃないと表示できないといった形になっているものでございます。

【加渡】

それが一つ私たちの選択の目安にはなるということですね。ありがとうございます。続いてですね。相本次長にもお伺いしたいんですが、新未来創造戦略本部としましてももちろん徳島県としましてもエシカル消費するぞっていうすごく心意気は高いわけですね。先ほど相本次長のお話もありましたが、今だけここだけ私だけという考えから脱皮しようということなんですが、有機農産物を購入するということはエシカル消費だと考えていいんでしょうか。

【相本】

はい。先ほどお話をさせていただいたんですけども、エシカル消費って何かっていうのを平たく言うと、やはり人とか社会とか環境とかを配慮しながら進めていく。その消費の仕方になると広く捉えられているという風に考えています。それで特に農産物とか食料品を普段私たちが購入する際に重視するのはやっぱり、その1に品質であって、それから価格であって安全安心であって、そういったことを見ながら日々ですね。かかっていくんだと思いますけれども、特に有機農産物は、環境に配慮した、環境負荷に優しいという生産品です。現状においては、生産量とか実量の課題があると思いますが、こういったものを消費者の方が買っていく。消費することで生産をバックアップしていく取組を進めていくこともエシカル消費において非常に重要な取組というふうに言えると考えています。

【加渡】

ありがとうございます。ということで、じゃあこれからは少しご意見交換していきたいと思うんですが、まずは佐野会長にお伺いしたいと思います。先程の話題提供の中にもあったんですが、皆さんエシカル消費頑張ろうとか SDGs って言ってるわりにはアクションが伴ってないじゃないかというふうな御指摘もあったんですが、消費者は例えば農産物を買うときにどういう基準、例えば価格優先とか安全性とかどういう基準を優先させて選ぶのでしょうか。ちょっとそのところ、具体的にこれが優先っていうのを教えてくださいませんか。

【佐野】

これは農林水産省の関係の調査でございまして、ちょっと調べてみたんですけれども、令和元年度の調査ですが、複数回答でございまして、1,200人ぐらいの調査と伺っております。野菜につきましては、1番目は味・鮮度が82%、それから価格も82%ぐらいですね。安全性が51%、産地が47%、見た目が37%、その他2%という数字が出ておりまして、果物につきましてもほぼよく似ておりました。1番目が味・鮮度・糖度82%、価格が78%、安全性が46%、産地46%、見た目39%、その他2%というふうな結果が載っております。

【加渡】

ということは、まずは鮮度と味がきて、次に値段がきて、その次に安全性というところに有機ということももしかしたら含まれるのかもわからないんですが、それよりも何よりもまずは鮮度と味と価格が優先しているというそういう現状があるということですね。

【佐野】

そうですね。意向調査によりますと、現在有機の商品を購入している人18%ですけれども、購入したいと思っている人は64%というふうな調査も出ておりますので、その価格が影響しているかなというふうな感じも受けております。

【加渡】

ですよねというようなお声があるということも踏まえて、消費者と流通の立場と両方おわかりになってらっしゃいます。泉川さん何か有機農産物もっと増やしてとか、こういう状態になったらもっと買いたいのに。いろんな消費者からのニーズとかお声とかあったら教えてください。

【泉川】

コープ自然派では価格は慣行栽培の約1.2倍の価格設定としています。また、生産者と顔が見える関係というのをすごく大切にしています。アンバサダーとか組合員活動で積極的に生産者との交流を図っています。付加価値はストーリーや、作り手の信頼とか生産者がどんな想いを込めて栽培したかということだと考え、それが付加価値と考えています。

【加渡】

じゃあちょっと高めなんだけど、一生懸命買い支えるわっていう方が多いですか。

【泉川】

そうですね。はい組合員さんにはそういうふうに理解していただいとると思うんですけども。

【加渡】

まさに買い支えるバイコットで有機農産品を応援するわっていうお声が届いてることですね。はい。それが消費者あるいは流通の現場なんですけど、やっぱり生産現場というのは非常に大変なものがありになると思うんですね。苦労もされてらっしゃるし、白桃さんどうでしょう。有機農業にやっぱり関わっていく上で、生産現場ずばり何が大変ですか。どんな苦労がありますか。何が困難ですか

【白桃】

そうですね。これは農業全般で言えることだとは思いますが、やはり自然の中でやるっていう、工場の中じゃないので。時々によって勘に頼ったりとかする部分もやはり出てくるんですよ。やっぱり先ほど言ったように理論として成り立っている。どういうふうに作ったらいいっていう方程式がある程度は成り立っているんですけども、本当にこうちゃんといいいものを作るおいしいものを作るというところでいうと、やはり湿度とか太陽の光とか温度とかの天候を加味して、そこはもう経験則でしかないのですが、そこが有機の世界ではまだデータ化されていません。本当に勘に頼る経験に頼ることしかできないので、生産現場では情報が足りていない、情報の積み重ねが足りていないっていうところが新規就農者とやっている中で大変な部分です。

【加渡】

やっぱり情報の積み重ねがまだまだという話ですね。フードハブ・プロジェクトさんは、小さいものと小さいもの、あるいは少量消費と少量生産をつなぐという非常にシンプルな活動を挙げてらっしゃいます。それによって中山間地域の課題を解決しようということを打ち立てられてるんですが、どうでしょう。今のその取り組みに対して、町内外からどのような声が寄せられていますか、課題というのは解決に向かってますか。

【白桃】

我々がこの取組を始めたのが7年前になりますが、当時はそういう有機栽培でそんなこと言ってもできるわけないでしょうっていうことで、後ろ指をさされながらですね。私当時始めた覚えがあります。毎日毎日畑に出て地域の人たちも同じように畑に出てるんですが、その同じフィールドで同じ言語の中で日々やっぱり姿を見てくれていることによって、すごく周りの方たちの見方が変わったというか、若い子たちが頑張ってるんだからと。例えば、私がにんじんを掘っている畑のところに、近所で寄り合いをしているおばあちゃんたちが、あんたたち頑張ってるからとにんじん買いに来たりするんです。別に家にもにんじんあるけれども、あんたのところのおいしいし、頑張ってるの分かっているから応援したいから買うわよとか。そういう少しずつの積み重ねができて、新しい新規就農者の子たちの取組を本当に周りの少量消費をする方たちが支え始めている形が少しですけど、見え始めたっていうのが現状です。

【加渡】

ありがとうございます。同じような質問になるんですが、阿部さんは、今6反の畑でオーガニックトマトを生産されているというお話でしたけれども、やっぱり何が一番困難だと課題だと感じていらっしゃいますか。また、あの私が作ったトマトをこういう思いで消費者に届けたいっていう何か熱い思いがあったら是非教えていただきたいんですが。

【阿部】

そうですね。私も本当に未経験で山の中で始めまして、その最初2、3年は本当に畑と家を往復で出会うのはタヌキと鹿とか、そういう時代を経て今あるんです。上勝は山の上なので、夏気温が低くてハウス内は暑いんですけども、大体10時ぐらいまでは作業できるって感じです。小松島とか市内ですともう暑すぎて夏は野菜が作れないっていうのを聞きますが、上勝でも夏は本当に暑くて水着で作業をしたいぐらいの感じです。あと山間部は人手が本当に少なく、みんな人手の奪い合いなんです。後から新

規で入ってきた方は、もう一人でやるしかないような境遇になりますが、それでもできるようなやり方を工夫して、今までやってきたっていう感じです。後そうですね、人手不足が私は一番の問題と感じています。本当に農業って奥が深いので、経験と勘を身につけた人が本当にいなくて、あと上勝町は高齢者がすごく 80%以上の高齢率なんですけど、皆さん農業できるんですけども、慣行農業なんで除草剤とか化学肥料とかをバンバンやってられるのを横で見えて、あんたもあれ入れろとかあれやればとかのアドバイスくれてありがたいんですけど、ちょっと私はそれはやってないんですみたいな説明する感じです。若手でちゃんと知識と経験を積んで続けている人が本当に増えてほしいなっていうのをすごく感じます。

【加渡】

ありがとうございました。やっぱり自然環境にかなり左右をされる。人手が足りない、情報量もまだ積み重なっていない。なおかつ経験と勘っていうのを持った人がまだまだいない。そういうところをこれから改善しなければいけない課題というところですか。

【阿部】

私は本当にそう思います。私が7年前に就農したんですけども、もう男性でも半分以上は辞められるんですね。それは生計を立てるのがやっぱり困難とか、いろんな問題があります。昔は本当に有機農業って理解されてなくて、私も就農する時、大変な思いをしたところもあって、周りの理解もやっぱりまだ日本は薄いなって思っていました。消費者の皆さんと何か話したらすごい興味のある人が多いんですけど、自分達の環境保全とかに参加できているんだっていうプライドというか、誇りを私はアメリカに長くいたんですけど、購入する側が本当にそういう思いが強くて生産者だけがそのプライドを持つんじゃなくて、消費する方たちも自分達は本当に出資しているんだとか。参加しているんだって威張っているようにする日本になった方が環境の事をみんなで捉えられると思うし、もう年々山でさえ農業や天候が不順でもう本当に作物を作れなくなってる現状を本当に感じているので、そういうのをもっとこう情報共有とか、皆さんが参加できているんだっていう意識を私は持っていただけたらなと思います。

【加渡】

ありがとうございました。今、非常に大事なキーワードをいただきました。生産者は頑張ってる。その思いを消費者に伝えと、それ大事よね、わかるわよって言ってくれるんだけど、その先がなかなかもう一歩いかない。だから、まさに買い支えるバイコット、あるいは私たちは消費で地

域の農業を変えてるんだ。変えていくんだっていうくらいのところまで。まだ消費者が至っていないんじゃないかという話ですね。

【阿部】

そうですね。

【加渡】

という問題提起があったんですが、田渕さんさっきパッケージからうちはもうプラスチックのパッケージやめたんですと、もういちごだけじゃなくて、そういうところまで総合的に地球の未来も地域の未来も考えてますよ。っていう田渕さんのご説明があったんですけども、どうでしょう。有機農業を支えていくためには、拡大していくためには、生産者だけが一生懸命頑張ってもなかなか難しいですよ。生産者のお立場から例えば消費者とこういう連携もしたい。流通とこういう連携もしたい。消費者や流通の方に何か一緒にやらないとか、こういうことをちょっとやってほしいんだけど。っていう御要望とか提案とかがあったら、ぜひ聞かせていただきたいんですけど、どうでしょう。

【田渕】

そうですね。やはり先ほども紹介しましたように、意外なところで意外なことが生まれてくると、その意外性がこう新たな突破口になったりすると思うんですね。さっき御紹介しました段ボールですね。今まではシールを貼らなければいけない、プラスチックに詰めなければいけないという固定概念で仕事をしましたけど。新しい方法があるんだっていうことが発見でき、それが本当の意味でのオーガニック、持続可能なことにつながっていくというふうに思っております。消費者だけでなく、いろんな持続可能なことに関して興味を持たれている方といっぱい話をして意外性を見出せるような機会を持ちたいなとは思ってますね。

【加渡】

具体的に田渕さん御自身が消費者と話し合いの機会を持たれる、あるいは事業の方や流通の方と何か交流する機会がおありになりますか。

【田渕】

実際のところほとんどないですね。いちごの販売が始まって直接買いに来てくれるお客様と話をする。そういった有機農産物に興味がある方がおいでになって、それで話をするっていうことくらいですかね。

【加渡】

どうでしょうの会場の皆さん、消費者の方、たくさんいらっしゃると思うんですが、やっぱり有機農業の現場とか有機農業の情報って知りたいですよ。皆さん、こう縦にうなずいてくださってます。でも、その情報ってどこ行ったら入手できるんだろう。どうやったら見せてもらえるんだろう。どうなるんだろう。なかなかそれってよく御存じないと思うんですね。なのでやっぱり生産者が今御説明いただいたように、こういうふうに工夫してこんな困難な中からやってるんです。消費者の方にもここで想い届けたい。こんな情報を届けたい。何かこう消費の現場と生産の現場をつなぐような連携ってどうでしょうできないでしょうか。

【田淵】

昨年、四国大学のゼミの中の単位の一つに、うちの農園をお手伝いすることに組み込まれた先生がいらっしゃいまして、2回ほど手伝いに来ていただきました。大学生の若い方なんで、有機や食についての意識はまだ芽生えていないんです。農園に来て実際に農作物に触れたり、いちごを食べてもらったりするそういう機会や経験によって、将来、そういうことだったんだっていうきっかけになってくれればいいなと思っています。是非来年も四国大学のゼミで当園を訪れていただければと思っています。

【加渡】

ありがとうございます。同じような質問を阿部さんにもさせていただきたいんですが、生産の立場から流通、お店、あるいは消費者に何かこう提案できること一緒にできること、あるいはこういうふうな課題があるから手伝ってもらえないとか、何か投げかけるものってございますでしょうか。

【阿部】

そうですね。うちの農園も最近、若い方が興味ある方が何週間も体験だけや、海外からもあります。上勝町はゼロウェイストというものがあるので、海外からもいろんな有機農業に興味ある人とかが来てくれてディスカッションをする場っていうのがあるので、私はすごい恵まれています、日本の方より海外の方が興味あるなって思っています。やっぱり学校給食ですとか、小さい時からそういうふうに学校で何かそういうチャンスというか、みんなが経験できる場所とか、味もですし、オーガニック野菜食べたことないっていう人も、高校生が来た時も言ってたし、もっとその小さ

い時からそういうのを経験できる場が何か作れたら、もっと話が簡単に大人になってもなっていくんじゃないかなと最近よく思います。

【加渡】

やっぱり経験とかそれは一つある意味で教育という分野にも関係してきますか。

【阿部】

私は身近に特定のお母さんがすごい興味がある方で、家は全部オーガニックとか、そういう子は結構多いんですけど。でも全くそういうのは食べたことないとかいう人も半分ぐらい高校生とかでいらっしゃるので、みんなが平等にこう食べたらもっとディスカッションを若いうちからできやすいし、もっと簡単になるんじゃないかなって思います。

【加渡】

会場の皆さんいかがでしょう。夕食でにんじんがあつたら、その夕食の中でこのにんじんは実は有機で作られた野菜よ、みたいな話題が食卓を囲んだ時に話が弾みますでしょうか。うんみたいな感じで、なかなかそこはそういう話題にはならないなという反応ですが、そういう意味で白桃さんどうでしょう。やっぱり有機農産物を広めていくあるいはエシカル消費で買い支える。あるいは今やってらっしゃるフードハブ・プロジェクトを進めていく。その根底には、やはり教育小さい時からやっぱりそういうものをしていくっていうのも大事じゃないかと思うのですが、その辺ってどのようにお考えになりますか。

【白桃】

やっぱりその教育というところはすごく大事だなって我々も思っております。先ほども言いましたが7年前からですね、食育として保育所、小学校、高校とかに行って、実際に農作物を育てる授業をしてきました。

例えばお米の授業であれば、みんなで種から苗を立てて、手で植えてもちろん機械でも体験してもらったりとかしながら、草取り、手やコンバインで収穫したりってことでやっていたんですよ。本当に教育は大事だなと思ったことが最近ありましたが、6年前に一緒に稲刈りの体験、お米作りの体験した女の子達にちょっとインタビューをする機会があって、その子達が身近な風景が変わって見えたっていうことを言ったんです。何かそれまでは通学途中で何か風景として農家さんがお米作りをしている。何かやってるなあぐらいにしか見えてなかったものが、その体験を学校の授業で一緒にやることによって何かすごくこう暑い中でおじさんが作業をして

いて大変そうだな。何でそんなに大変なことをするんだろうとか、やっぱり想像ができるようになった、ものの見方が変わったっていうことでした。その話を聞いて体験が等しく、みんなに届く場所っていうのはやっぱり学校、学校教育で、食育や食農教育を取り入れてやるのが、物事の表面だけじゃなく、奥を見る力を養うことにつながるのかなと感じました。

有機農業だけじゃないと思うんですけど、色んなこうエシカルの取組であるとか、SDGs は多分、その経験をするによって別の見方も農業以外、食以外の見方もできるようになると、すごく大事な視点かなと思ってます。

【加渡】

ありがとうございます。泉川さんから先ほど誰もが有機農産物を食べることができる社会を作っていきたいんだというようなことがございましたけれども、どういう具体的な取組がこれから進んでいくんでしょうか。何かこういう計画もしています。こういう活動を続けていきたいと思ってますっていうようなことがありましたら、是非教えてください。

【泉川】

学校給食にもすごく力を入れようとしているところでもあります。やっぱり一番大事なのは生産現場を見ていただくということで、本当に組合員活動でももちろん、理事研修や交流でもセンターのピッキングの現場を見ていただくとか、生産者の方のところに行って、生産者の話を聞く収穫体験をするなんかいうことも、今以上に大切にしていかなければいけないなと思います。教育というところで言いますと、やはり大人の方の知識がまだまだだと思います。このミツバチがいなくなったっていう現実のように固形の農薬とかのことをやっぱり知っていただくために、自然派のカタログってもう永久保存版していただけるぐらいにカタログ上にいろいろな知識とかを掲載してるんですけども、もっともっとその辺も力を入れていきたいなとは思っています。

【加渡】

ありがとうございます。やっぱり消費者の力というのは、佐野会長、非常に大きいものがあると思います。消費者の権利っていうのは安全なものを選択できる。これも権利ですし、消費者の声を届けて、それを聴いてもらうというのも権利だと思うんですけども、どうでしょう。有機農産物に関して会員の方、皆様からどんなお声が届いてますか。あるいはそれを反映して、これからどのような消費者教育が必要だというふうにお考えでしょう。

【佐野】

有機農産物につきましては、やはり取扱店舗の少なさっていうのがまず挙げられると思ってるんです。会場にお越しの皆様ですと、明日でも買ってみようかなと思ってお店に行っても、どれが有機なのかなとか。お野菜の場合は有機って書いてくれと言ったらすぐと思うんですけど、ちょっと加工したものとかですと、どれがそうかなってずっと探さないと出会わないと言いますか、有機 JAS マークございますけれども、やはり表示されると小さいものになりまして、お店に行ってみて感じたことは、つけれるものは頭に有機という言葉をつけて大きく表示をするっていうことも一つあると思うんです。

現在でも有機ごまですとか、有機トマトケチャップですとか、あるいは有機野菜 100%ジュースとかいうふうに大きな活字を使ったものもございますけれども、まだまだ表示が小さくて買ってみようかなと思う方まで届いていないって言いますか、そういうところがあると思いますので、そういう表示の面、品名の面なんかをクリアにしてみんなにわかりやすくしていただけたらということと、あと、スーパーさんにおきましても有機のコーナー的なものをつくっていただいて、先ほども地球を守っているっていうふうな意識が消費者にも必要っていうお話もございましたけれども、コーナーで訴求力のある言葉で問いかけて説明をして、皆さんにそれでこれだったら買ってみようかなっていう気持ちにさせれるような、そういうところをちょっと作っていただけたらというふうに思っております。

私は、過去にマイバッグ運動とか消費者協会でやっておりましたので、そのときには店内でマイバッグの歌が流れたりしておりました。今回も食育の日っていうのは毎月 19 日ですが、そのときに店舗で放送していただいて、今日は何の日、食育の日っていうふうな形で、そこでちょっとこう有機の食品とか有機野菜の説明をしたりして、みんなの認知度を高めていくっていうふうなそういうことはわりと手っ取り早くて販売店舗の方に協力していただけたらすぐにでもできるんじゃないかなという風に考えておりますので、よろしくお願いいたします。

【加渡】

ありがとうございます。今日は生産のお立場から、そして加工流通消費のお立場からパネリストをお迎えしてのディスカッションを進めてまいりました。最後にパネリストの皆様から一言ずつ、今日のディスカッションを通して感じられたことを御意見として頂戴できればと思います。ちょうどマイクは佐野会長の所にございますでしょうか。はい。佐野会長から一言ずつお願いいたします。

【佐野】

すごく有機について学ぶことが出来まして、やはりこういう機会が他の方々にもぜひ必要だなというふうに感じましたので、また講演会等でも普及していただけたらと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

【加渡】

ありがとうございました。それでは泉川さんお願いいたします。

【泉川】

はい。生業としての農業に循環保全の視点をプラスしていてもらいたいなというのと、農薬化学肥料を減らして循環型資材に変わっていく必要性を経営上でも必要になってくる時代が変わってきているので、消費者の皆様には現状の理解と生産者がそこにかかる労力が今まで以上にあるということに理解をしていただきたいなと思います。今日は所属が違いますけれども、このような同じ思いを持った方々とこのような時間が持てたことが大変うれしいし、私自身大変勉強になりました。できることから、引き続き有機農業を推進していきたいと思っておりますので、また連携して一緒にできることがあればと思いました。ありがとうございます。

【加渡】

ありがとうございます。それでは白桃さんお願いいたします。

【白桃】

今日ですね。もう私が始めた7年前からすると、こういう有機農業フェアということで、皆さんの前で話すことなんかもう想像もしてなかったなっていうのは率直な感想としてあります。でも、先ほど田淵さんもおっしゃられていたように、何かこういうフェアがなくなるぐらい、有機農産物とか安心安全なものがちゃんと消費者に届く環境とか、そういうものがやはり進んでいけたらいいなと思います。有機 JAS マークなくても大丈夫っていう世界が少しでも近づけばいいなと思って、今日は皆さんとお話をさせていただいておりました。

【加渡】

ありがとうございました阿部さんお願いいたします。

【阿部】

はい、私も本当に7年8年ぐらい前、白桃さんと同じぐらいで、こういう話を自分がここでできるというのはすごいびっくりです。ここ最近気候が本当に大変なぐらい毎年変わってきています。種も私の知識では日本には80%ぐらい海外から輸入しているので、もし戦争とかが始まったら食糧がちょっと不安みたいなところがあります。生産者とか消費者とかいろいろな分野の方がこうしたディスカッションから知らない知識を取り入れて、また、有機農業とかを盛んにさせていくっていうのは本当に素晴らしいし大事だと思いました。

あと、徳島県は有機農業の小祝先生がいらっしゃることもありますけども、すごいほかの地域と比べたら進んでいると私は思っていて、それって私は海外に結構10年ぐらい行ったんですけども、あのオーガニックって本当に結構すごい価値があるものと世界では見てますので、せっかくいい人材とか環境がある。だから、もっとそれを大事にしたら、徳島県の価値が上がって世界からも注目されるようないい場所になるんじゃないかなともいつも思ってます。本当に今日勉強になりました。ありがとうございました。

【加渡】

ありがとうございました。それでは田渕さんお願いいたします。

【田渕】

農政局（徳島県拠点）主催の有機農業フェアは第1回目だったと思うんですね。最初に農政局さんから話があった時は大変驚きました。本当についてこの国が動き始めたんだと思いました。今回は1回目のフェアが開催されて、いろんなことで大変だったでしょうけど、まずは関係者の方に心からお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

昨今持続可能だとか、いろんな言葉がささやかれてますが、僕の中では、そういう持続可能祭りみたいな感じに聞こえるんですけど、裏を返せば、危機的状況がすぐそこまで来てるんだよっていう風に捉えられませんか。農業をしていたら隣の古いきゅうりを作っているおじいさんと話しをして、昔はミツバチがいっぱいたのになあ、今全然おらんのよと。もう人工受粉するしかない世界、ミツバチが消えたらどうなりますか、人間は生きられないんです。想像してみてください。持続可能っていう言葉ばかり先行してますけど、持続不可能な世界を想像してみてください。恐ろしい世界が待ってます。間もなくそういう世界が訪れるかもしれないってところ、危機的状況まで来てるってところを認識して、これから本当に次世代の人達の未来が輝くような後世に、素晴らしいものを残せる

ような社会作りに一緒になって取り組んでいかななくてはなりません。真剣になって、必ずできるはずです。頑張っていきましょう。

【加渡】

はいありがとうございます。今日はですね。有機農産物をエシカル消費で支えるということをテーマに、5人のパネラーの皆様とディスカッションを重ねてまいりました。会場でご参加いただきました皆様、それからウェブで視聴していただいている皆様、長時間にわたりお付き合いをいただきありがとうございます。

今だけここだけ私だけからですね、今からここから私からアクションを起こして、そして持続可能な地域、持続可能な食の未来を皆さんと一緒に考えていく。そんなきっかけの1日となりましたら、幸甚でございます。最後になりましたが、5人のパネリストの皆様に大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございます。それでは以上をもちまして、第二部のパネルディスカッション終了とさせていただきます。ありがとうございました。

【司会】

加渡先生パネリストの皆さん、どうもありがとうございました。本日は限られた時間でしたが、ご参加の皆様におかれましては、さらに有機農産物に対する興味を高めていただければ幸いです。以上で徳島有機農業フェア消費者団体等とのパネルディスカッション終了いたします。本日、会場参加の皆様にはお帰りの際、配布資料の中にございますアンケート用紙に御記入いただき、テーブルの上に置いていただくか、会場出口のアンケート回収箱に投函していただきますようお願いいたします。また、WEB参加の皆様につきましては、後日アンケート用紙をメール配信いたしますので、御協力をお願いいたします。今後の会議開催等の参考とさせていただくため、御協力をよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。